



HAL
open science

Eddy Dufourmont

► **To cite this version:**

Eddy Dufourmont. . International Inoue Enryo Research - (Bilingual Open Access Journal), 2013, 1, p.145-157. hal-01524890

HAL Id: hal-01524890

<https://hal.science/hal-01524890>

Submitted on 19 May 2017

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

【 論文 】

中江兆民と仏教—井上円了と中江兆民の論争の再考

エディ・デュフルモン (Eddy DUFOURMONT)

要旨：

明治思想史において井上円了に仏教への関心等のため重要な立場が与えられるが、仏教への関心は井上に限らず、中江兆民にも現れたことを証明して、中江兆民の哲学を再考したい。それは従来の研究において取り上げられなかったけれども、「破唯物論」の著者であった井上の立場と、唯物論「続一年有半」の著者であった中江兆民の立場が哲学的にも政治的にも異なっただけに、彼等の哲学の相違を論じた上で、明治思想史における仏教の位置をより明らかにすることができるように思われる。

はじめに

思想史上、明治という時期はヨーロッパの哲学を獲得した上で日本の哲学が形成された時期と看做されている。その点で、井上円了（1858年-1919年）と中江兆民（1847年-1901年）は主な思想家とされ、高く評価されているが、一見すれば彼等の位置は対照的に見える。つまり、宗教とりわけ仏教を重視したばかりでなく、哲学学会の設立に関わった円了と違って、兆民は、「日本には哲学無し」という文章を書き残した¹し、無神論と唯物論を述べた。さらにいえば、井上円了は1898年に『破

唯物論』というタイトルで著作も著した。また、兆民が自由民権運動の思想家であり、円了が政府に近かった人物であったことで政治の側面でも円了と兆民は対照的であった。このように、円了と中江を対照的な位置に置くことができるように思われるが、円了と兆民の相違を論じれば、進化思想の影響を強く受けた明治時代における宗教の問題を理解できるのではないか。特に仏教に焦点を当てるならば、円了と兆民の比較は有意義であり、明治時代における仏教の位置、また当時の哲学観を考え直す機会になると考えられる。

しかし、中江兆民がどれほど仏教を自分の思想の要素としたかということは未だに十分に研究されていない。それに関して最初の問題点は、兆民における仏教の位置が徹底的に検討されていないことにある。従来の研究において、「先生平生禅を好み多く交を方外に結び、且つ博く仏典語録を獵渉」²したと書いた幸徳秋水の記録を踏まえた小島祐馬は、兆民が『史記』、『莊子』と禅宗の『碧巖録』を愛読してその三冊が兆民の文章に大きな影響を与えたことを指摘し、初めて兆民の思想における仏教の存在を証明した³。上山春平は、「兆民の育った日本社会が無神論的傾向の強い仏教圏に属すること、とくに兆民が仏教系の思想の中でも無神論的性格の徹底した禅に関心をもっていた」⁴という興味深い仮説を述べたが、それ以上兆民における仏教の位置を徹底的に考察しなかった。

福永光司はより進んで兆民と禅について論じたが、仏教そのものより、むしろ仏教と荘子の関係を証明し、「山川草木一切成仏」の禅の仏教思想が『莊子』の「道」の哲学にその源流を」持ったのを主張することに止まった⁵。もう一つの問題点がある。上山氏は、兆民の唯物論の要素として、フランス唯物論の影響を認めたものの、それと仏教を区別して、仏教の役割も重視すべきと述べた⁶が、兆民はフランス思想を通じて自分の仏教観を作った可能性を考えなかった。よって、以下では兆民における仏教の位置をより徹底的に論じてみたい。

1. 兆民における仏教の存在を問う

筆者は以前に公刊した論文で、兆民の唯物論が晩年からではなく、当初より存在し、彼の生涯において一貫した思想であったという仮説を述べたが、また彼自身の唯物論を考えるため、どのフランスの思想家でも（ルソーを含めて）兆民は意図的

に受け取った側面があるし、受け取りたくなかった側面もあることを証明した⁷。仏教の場合にも兆民は同じ態度を取ったといえる。たしかに中江兆民が釈迦と仏教を批判した箇所はある。たとえば、『統一年有半』（1901年）において、兆民は書いている。

「余は断じて無仏、無神、無精魂、即ち単純なる物質的学説を主張するので有る」⁸。

「釈迦耶蘇は不朽不滅して已に久しきも、路上の馬糞は世界と共に悠久で有る」⁹。

ところが、兆民は無神論のもとで仏教を批判したのだからといって単に仏教を蔑視したわけではない。兆民は、釈迦を孔子とソクラテスと共に賢者としてよく例えとしている¹⁰。

同じ『統一年有半』でも、兆民曰く

「釈迦老子も初年の間は、専ら天下人心の妄念妄想を一洗し、根本的に其自説を蒔き付けやうとして所行無常¹¹とか、唯此一事实、余二即非真¹²とか、都て世界万物を一無に帰せしめて、唯心のみを有とした様だが、是も実は矢張方便で有った」¹³。

兆民は孟子に加えて道教の影響をよく受けたのはよく知られており、『統一年有半』にもその影響が現れるが、先の箇所を読めば、兆民が仏教に道教と同じ評価をしていることに注目すべきである。それに、『統一年有半』で兆民が仏教と道教と儒教がキリスト教よりも優れていると述べている¹⁴。兆民の評価は、仏教と道教の完全な肯定ではないということはいうまでもないが、仏教と道教が、人類の歴史の中で、無神論への段階であったことを認めた評価であった。それは、『一年有半』でも現れる。「日本には哲学無し」を書いた後、兆民は以下のように書いている。

「唯仏教僧中創意を発して、開山作仏の功を遂げたるもの無きに非らざるも、是れ終に宗教家範囲の事にて、純然たる哲学に非ず」¹⁵。

この箇所は否定的に理解できるが、仏教は哲学ではないにもかかわらず真の哲学への段階であったと、肯定的にも、理解できる。

2. 仏教は無神論。フイエを経由した仏教の理解

そこで、兆民に強く影響を与えたフランスの哲学者のことを見逃していけない。というのは、兆民は日本で漢学を勉強しながらも、フランスの哲学者のもとでも自分の仏教観を作ったからである。とりわけ、『理学沿革史』のタイトルで兆民が翻訳

したアルフレッド・ファイエの『理学沿革史』の中で、仏教がいくつかの箇所では言及されている。

ファイエはまず仏教を「印度の哲学」とし、中国、エジプト、ユダヤ人の思想と共に（イスラム哲学が完全に無視されて）、ギリシャとヨーロッパの先に現れる「古昔ノ理学」としている¹⁶。

つまり、ファイエの哲学史において、当時の東洋学者と同様に、非ヨーロッパの哲学は、哲学の原始的段階に過ぎず、ギリシャとヨーロッパの哲学に当たる「真」の哲学になれない。孟子と莊子を愛読した兆民がファイエの論説を翻訳しながらもそれに完全に納得できたのは疑わしい。しかし、兆民の好奇心を引いたかもしれない別の箇所がある。というのも、ファイエは釈迦が民主主義的側面と、無神論と唯物論に近い側面のある思想を述べたことで仏教を高く評価したからである。その二つの側面を兆民が自分の信念にしたと考えられる。

まず、ファイエによれば、釈迦は「一切衆生皆平等ニシテ貴賤高下有ルコト無シ（省略）四海ノ人ヲ視ルコト兄弟ト異ナルコト勿レ」と述べた。その点で「国家ヲ經理スルノ道ニ至リテハ初ヨリ之ヲ度外ニ置ク者ノ如シ」と書くがファイエは「義ニ至リテハ藐焉トシテ聞クコト無シ」と書くよう、仏教に賛成である¹⁷。

平等の普遍性を信じた兆民がファイエの論説に賛成であったとすれば、ファイエを通じて仏教の肯定的な見方を受け取っただろう。更にいえば、ファイエは孟子の思想を紹介し、打幕政論と特徴づけている¹⁸。仏教に関する箇所と同様に、ファイエを読みながら兆民は中国思想にも民主主義思想の要素を見つけたかもしれない。それはリベルテ・モラルを説明する「心神の自由」の中でも確認できる。「自ラ意ヲ創シ（省略）利益スル有ラント欲スル此レモ亦以テ人心自由ノ性有ルノ明証ト為ス可キナリ」と述べている兆民は「瞿曇曰く唯此一時事実¹⁹ト其意モ亦仲尼一貫ノ義²⁰ト相同ジケレバ此レ瞿曇モ亦人心ヲ以テ自由ノ性有リト為スナリ」と書いている²¹。

次に、無神論に関するファイエの仏教観を論じよう。ファイエは「静観深察ノ工夫ヲ用ヒ自ラ一説ヲ創スルコトヲ求メ稍々波羅門教ノ範圍ヲ出」た「碩学ノ士輩」として釈迦と、ヴェーダ時代の唯物的哲学者であったカピラ(kapila)を紹介し、カピラの説は「互官ノ感触ヲ主トシテ（省略）其極終ニ神ナル者有ルコト無シ」、「サンシュアリズム」と定義されている²²。

面白いところに、兆民と翻訳と原文を比較すれば、兆民はファイエの書くところの意味を若干鈍化していることがわかる。すなわち、ファイエは原文で「Kapila est l'auteur

d'un système sensualiste qui semble aboutir à la négation de Dieu」と書くように、フイエは推定を述べているが、兆民はそれを確実として記述している²³。『理学沿革史』においてカピラ思想は完全に唯物的無神論になっている。もちろん、インドの哲学はカピラに限らないが、彼を特に紹介するフイエの意図があるし、和訳での兆民の意図もある。さらに、次の段落にも同じ勝手な翻訳を見出すことができる。*Bhagavadgītā*の引用をしたあと、フイエが「les sens sont puissants, mais l'âme est plus puissante que les sens, l'intelligence est plus puissante que l'âme, et au-dessus de l'intelligence s'élève l'Être」と書いたところ、兆民はÊtreの代わりに、「神」と書いた。このように、兆民の『理学沿革史』でフイエの批判している *Bhagavadgītā* は有神論になっており、カピラと対照されている。

釈迦の説は、「専ら論理«ロジック»ノ学」であり、「セプチシスム」と定義されている。以上のカピラと釈迦の説は兆民の唯物論と無神論に関連させることができるのではないか。フイエ自身は「僧侶ノ威権ヲ破壊シ道徳ノ諸行ヲ貴尚シテ一切宗教に係ル儀典ヲ廓除せり」、あるいは「自ら号シテ理学士ト称シテ絶エテ神ノ名号ヲ仮リテ唱説スルコトヲ為サズ」と書き、反宗教者という釈迦の肖像を描いており、道徳は宗教の位置を占めるべきと唱えている²⁴。

このように、兆民の唯物論はフイエなどのフランス哲学を經由して仏教を再発見したといえる。

3. 兆民の政治思想と哲学における仏教的要素

兆民は自分の翻訳と著作において孟子と道教の用語を使ったのはよく知られている²⁵が、仏教もまた然りである。兆民は、自分の身体を超えて真理を探究すべきということを推薦する仏教を高く評価したと思われる。それは、真理の超越的な質を説明するために、臨済宗の『碧巖録』から、兆民が全生涯を通じてよく使った表現の「両鏡相照」によって代表されている²⁶。

また、東洋自由新聞の社説で、中江はレイバルテ・モラルについて論じるところで、「六欲五悪」という表現を使っている²⁷。「五悪」は兆民自身が創った言葉のようであるが、「六欲」は疑問なく仏語の言葉で、六根から生じる欲を意味している。要するに、この論文でも仏教の存在が現れる。

兆民は「六根」という言葉も使っている。その言葉は日常生活の言葉であるのはいうまでもないが、兆民は明らかに「瞿曇ノ所謂六根也」と書いて言及している²⁸。言葉の六根はフイエの『理学沿革史』の中でも現れ、兆民は「ニルワナトハ六根ノ生ヲ解脱シテ不生不滅ノ域ニ侵入スルヲ謂ウ」と翻訳している²⁹。

六根（サンスクリット語では *ṣaḍindriya*）とは仏教で眼・耳・鼻・舌・身・意の6種の能力を意味する（別の定義がある）。六番目の「意」の能力は「心」、「精神」、「智」の同類語になっている。興味深いのは「六根」を通じて身体と精神が同一したものになっていることである。『統一年有半』では、兆民は身体から別れており、身体と共になくなる精神像を述べているが、身体の五感の傍らに、意志という能力の存在を認めている。そこには、仏教の六根に近い発想があるではないか。しかし、兆民の唯物論が正反対的に異なっている点がある。それは身体とこの世を認めた上での幸福の探求である。『理学沿革史』の翻訳の中で仏教の特徴として兆民が加えたように、「六根ノ生ハ本空幻なり」³⁰。兆民の唯物論は逆に精神と体の区別づけがない身体を通じて真理に至れると考えている。

六根について論じて兆民は次のように説明している。その「心神感応ノ力」とは「感受・フイーリング」と「願欲・ウイル」と「意念・ソート」のことであり、またソートは「合併力・アグリメント」と「差別力・ヂスクリミネーション」と「記憶力・メモリー」という「三作用」である³¹。このように、以外なことで、兆民の論説は愛読したフランスの哲学でも中国思想でもなく、英語圏の思想家の引用に基づいている。兆民は誰の著作を引用しているのかを説明しないので、その思想家が誰かということは確認しがたい。

兆民が仏学塾においてトスペンサーの『心理学原理』を使用したのは確かであるが、その哲学者は「本論」で現れる用語を使った精神論を述べていない。筆者が調べたところ、アレクサンダー・ベイン(1818年－1903年)の処女作であった *The Senses and the Intellect* (1855年)の中で、全く同じ用語の精神論を見つけた³²。ベインは、科学としての心理学の創設者の一人であり、ジョン・スチュアート・ミルの友人でもあった。別の傍証は引用の著者がベインであったことを証明している。ベインの名前は『理学沿革史』の中で言及されているし、兆民自身も『理学鉤玄』で、イギリスの主な哲学者として彼の名前に言及している³³。つまり、兆民がベインの存在を知っていたことは疑いようがない。さらに、兆民がフランスで留学していたころ、ベインの著作はフランス語で翻訳されていた³⁴。このように、「本論」で引用されて

いる精神論の哲学者がペインであった可能性は高い。ところで、ペインは唯物論者ではなかったけれども、形而上学から離れた、完全に体の感覚に基づいた心理学を目指したことに注目すべきである³⁵。兆民におけるペインの影響はこれから更に論じられるべきだ。

4. 兆民とショーペンハウアー

兆民と仏教を論じる際に、仏教を尊敬したショーペンハウアーの存在を見逃してはいけない。兆民は、ショーペンハウアーの「*Über die Grundlage der Moral*」を、Auguste Laurent Burdeau（1851年－1894年）による仏訳の「*Fondement de la morale*」から1894年『道徳学大原論』のタイトルで翻訳した。それはショーペンハウアーの本の中で仏教が現れるからだろうか。従来の研究において兆民がその著作を翻訳した理由はほとんど解明されていない³⁶。ショーペンハウアーの著作は兆民が愛読したルソーの『人間不平等起源論』を継承するものであると共に、孟子の主張する「惻隱の心」という言葉で、*Mitleid* を意図的に翻訳したという理由がある³⁷。

更に、ショーペンハウアーがキリスト教から完全に乖離していないカントの道徳観を批判する点で、無神論者の兆民を引き付けたのだろう。また Burdeau 自身も文部大臣として、政教分離を唱えて世俗主義的な教科書を書いた事実を無視していけない³⁸。しかし、『理学沿革史』ではフイエはその点でショーペンハウアーを鋭く批判している。フイエにとって、仏教とショーペンハウアーの認める欲望の解脱が厭世主義に過ぎず、ショーペンハウアーの考える自由は、個人に基づいている、普遍的な価値としての自由ではなく、個人性を否定する形而上の自由に他ならない³⁹。

兆民の翻訳したジャンマリー・ギュイヨーもショーペンハウアーの厭世主義を批判しており、彼に楽観的な意義を与えている⁴⁰。兆民も『理学鉤玄』の中で同じ理由でショーペンハウアーをよく批判し、また兆民によれば、ショーペンハウアーの好んだ「意志」という概念は神の別の名前になっている⁴¹。更に、ショーペンハウアーは輪廻に対して曖昧な態度を示した事実もある⁴²。ようするに、兆民にとってショーペンハウアーの哲学は十分に無神論ではなかったようであるし、ショーペンハウアーの厭世主義はよろしくなかったのである。

5. 井上円了との論争

兆民がそれほど仏教を利用したのだとすれば、井上円了の哲学との相違をどういう風に理解できるか。

円了は「哲学は総合の学なり」、「科学の結果を集大成するものは哲学なり」と書いている⁴³。それは、兆民と同じ出発点といえよう。

ただし、兆民は明らかに宗教と科学の区別をつけている。それは彼に限らず、他の哲学者にも現れる。たとえば、兆民と同様に唯物論者であった津田真道も、科学の一部であり、帰納法に基づいている哲学と、演繹法に基づいて「万古不易の道理」を求めており、虚学に過ぎない仏教と儒教という宗教の間に区別をつけている⁴⁴。円了は別の道を辿っていく。つまり、彼は兆民の正反対で唯物論から哲学を始める。円了も兆民も「元素」、または「有形」と「無形」という概念に基づいて宇宙論を述べている。ところが、その概念の定義が違っている。円了によれば、元素は、「無形中に有形を含み、有形中に無形を含む、即ち有形無形の相含」だとしており、有形は物質性であり、無形は非物質性である⁴⁵。兆民も宇宙が「大有」と同時に「大空」と述べた点で、有形と無形の区別を相対化しているが、元素は彼において完全に物質性である⁴⁶。

同じく、時間と空間について、円了は「無限の形式なり」と述べて⁴⁷、兆民と同様であるが、円了は「物的にもあらず、心的にもあらず」とする一方、兆民は完全に「物的」としている。それゆえ、円了は兆民の無靈魂論を鋭く批判しており、「其皮相の浅見たるは一笑せざるを得ず」と書いている。というのは、円了が「身体を造り出す前に、精神作用を造り出すべき生元あるを要す、是れ身心の根元なり」と考えているからである⁴⁸。

そもそも、円了の考えた唯心論と唯物論とはなんであったか。彼によれば、「外界を起点とする」唯物論は、「内界を排除せんとし」、唯心論は「内界を根拠と」して「外界を否定せんと」する⁴⁹。しかし、本当にそういう風に哲学の唯心論と唯物論を定義できるのか。たしかに、円了は「世界の原始及物質の本源は不可知的なりと断定して置くより外に説明の道はありませぬ」と書く⁵⁰が、そのような批判は兆民の唯物論に適用できない。

ともかく、円了は唯物論と唯心論を超えて進んだ「新唯心論」を主張しようとした。しかし、円了の「新唯心論」は従来の唯心論と同じ思想に過ぎないという疑問

が起こる。「余が説は此両面を存する中庸説なれば、唯物にもあらず、唯心にもあらざるべきも、二者相對する時は唯心論を取るものであります」と彼は述べている⁵¹。井上円了の態度は、唯物論と唯心論を統一した、哲学史の第三段階になる井上哲次郎の實在論（折衷主義）に近い⁵²。

円了が唯物論を排斥したのは従来の宗教を庇うためではない。実は、円了も進化論のもとで、「拝物教」、「拝人教」、「拝天教」、「一神教」が現れたとき、「哲学の知識に乏しく理性の心眼の未だ明か」ではなかった⁵³。さらに、円了は、不合理性という点でキリスト教を鋭く批判しながらも、宗教そのものを決して排除しなかった。逆に、「我第一敵は非宗教にして、すべて宗教と其主義を異にする理学哲学の類是なり。之に対すれば、耶蘇教も佛教も共に同朋同類となる」と述べている⁵⁴。

兆民の思想において進化論は無神論の武器になっており、円了の場合、進化論と仏教を一致させようとしている。が、円了は進化論の理解はどれほど正しいだろうか。というのは円了は進化論が生き物また有形学の範囲だけに適用されるべきであり、心理や道徳や宗教に適用されるべきではないと考えているからである⁵⁵。また、円了、物質不滅、勢力恒存、因果永続という論説に賛成であり、その論説のもとで、進化とは単なる進化でなく、進化と退化を総合した「大化」、「輪化」が宇宙の大原理であるとしている⁵⁶。要するに、いくら科学の役割が評価されても、円了の理解する進化論とは、科学的な進化論ではなく、宗教的な原理としての進化の論理に過ぎない。

宗教に進化論を適用すると、円了は一神教などの従来の宗教よりもパンティズムが宗教の進歩を代表すると考えている。興味深いことに、兆民もパンティズムを、多神教と一神教より進歩した宗教と考えて無批判に紹介している⁵⁷。

しかし、兆民は、哲学が人類の歴史において宗教より進んだ段階であると考えた。円了は宗教も哲学も進歩できるし、「哲学は知性及び理性の作用によりて、表裏両面より宇宙の真相するもの、宗教は信性の上に感受したる一如の衝動を実際に応用する道を開示するものとなすにあり、故に一は理論的、一は実践的なるの異同あり」と書くように⁵⁸、宗教の役割は哲学（科学）の役割に添ったものであるとしている。

では、円了によれば、パンティズムが宗教の最後の段階だとすれば、なぜ彼は神儒仏道を守ろうとしたのだろうか。それは理解しがたい。円了にとって唯物論が拝金宗と体欲宗の思想であることと、三道（神儒仏道）と違って、「俗道」の名前付で外来の思想であることを強調している。つまり、唯物論への批判は、「護国愛理」と

いう標語のもとで「皇室國體と共に榮え共に盛んなりし神儒佛三道」を守るためであった⁵⁹。それは、円了の哲学が「新唯心論」と主張しながらも、とにかく唯心論であったもう一つの証明ではないか。

結局、兆民と円了が政治と唯物論を巡って对象的な立場にいたにもかかわらず、明治時代に日本の思想家がどういう風に哲学そのものを考えたかという問題に関して、彼らの相違点と類似点は興味深い。彼らの相違点はよく指摘されてきたが、類似点もあった。兆民も円了も進化論と宗教を巡る論争の影響を受けて、また日本の運命を憂えて、哲学を日本国民の基礎とすることを欲した。さらに、彼らは歴史的段階としてヨーロッパとアジアを越えた新しい哲学を目指していた。では、仏教がどのような位置にあったか。兆民はルソー研究などのため西洋学者というイメージを持たれているが、以上に証明したように、円了と同様に仏教を自分の思想に参考した。その意味で、明治時代においてヨーロッパの哲学が導入されたからといって仏教が単純に批判や排除の対象に過ぎなかったわけではない。

ただし、円了と兆民の仏教観と哲学観が違ったことは否定できない。その相異は基本的に彼らの政治的な意図にあった。兆民は自由を獲得することができる道徳を目指しており、仏教を利用したのは仏教やキリスト教といった宗教を超えた哲学の無神論・唯物論を主張するためであった。円了は逆に、指導者の利用できる、キリスト教に抵抗することができる新しい教化を目指しており、仏教を利用したのは、新しい仏教を、無神論・唯心論としての仏教的な哲学として主張するためであった。

結論

兆民のケースが示すように、明治という時期は単にヨーロッパの哲学を受け取った時期なのではなく、哲学を獲得した上で仏教などの思想を再考察した時期であったことは事実であったし、哲学と仏教両方から要素を受け取る態度は井上円了に限らなかった。兆民は、単純に日本における従来の仏教解釈を利用せず、フランスなどのヨーロッパの哲学者の仏教観も利用して、自分の仏教観を作っており、その上で、自分の唯物論を作った。彼は基本的に時間と空間を越えた「真理」を重視したからこそ、有神論に至らず、この世から離れることを招く荘子や仏教を利用したかったということがわかる。井上円了は逆に宗教の重要性を再発見した。両名の立場

は対照的であったことはいうまでもないが、二人とも近代における仏教の歴史を代表したといえる。

注

- ¹ 中江兆民『続一年有半』（『中江兆民全集』第10巻、岩波書店、1983年）、p.255。
- ² 幸徳秋水『兆民先生』岩波文庫、1960年、p.30。
- ³ 小島祐馬『中江兆民』弘文堂、1949年、p.25。
- ⁴ 上山春平「兆民の哲学思想」（桑原武夫編『中江兆民の研究』岩波書店、1966年）、p.39。
- ⁵ 福永光司「中江兆民と『莊子』と禅」、月報5、『中江兆民全集』第2巻、前掲、pp.1-6。
- ⁶ 上山春平、同一、p.39。
- ⁷ Eddy DUFOURMONT. "Nakae Chōmin a-t-il pu être à la fois un adepte de Rousseau et un matérialiste athée ? Une tentative de resituer sa philosophie à la lumière de ses sources françaises et du Citoyen de Genève", *Ebisu*, 45, printemps-été 2011:5-25.
- ⁸ 中江兆民『続一年有半』前掲、p.235。
- ⁹ 同一、p.242。
- ¹⁰ 例えば、中江兆民「古今垂細亜地方の癖として」（『中江兆民全集』第14巻）、p.226。「決闘」（『中江兆民全集』第11巻）、p.269。「一年有半」（『中江兆民全集』第10巻）、p.161。
- ¹¹ その言葉は涅槃経と妙法蓮華経にある。
- ¹² その言葉は妙法蓮華経、第二「法便品」にある。引用が示すように、「法便」その言葉も兆民に使われている。
- ¹³ 中江兆民『続一年有半』前掲、p.275。
- ¹⁴ 同一、p.246
- ¹⁵ 中江兆民『一年有半』（『中江兆民全集』第10巻、前掲）、p.155。
- ¹⁶ 中江兆民『理学沿革史』（『中江兆民全集』第4巻、前掲）、p.47。
- ¹⁷ 中江兆民『理学沿革史』前掲、p.50。
- ¹⁸ 同一、p.96。
- ¹⁹ 『法華経』、方便品第二。「方便」は『続一年有半』の中で現れる。
- ²⁰ 『論語』、里仁、十五。

- ²¹ 中江兆民「心思ノ自由」(『中江兆民全集』第14巻)、p.14。
- ²² 中江兆民『理学沿革史』前掲、p.67。
- ²³ Alfred FOUILLÉE. *Histoire de la philosophie*, (Paris: Delagrave, 1875): 9.
- ²⁴ 中江兆民『理学沿革史』前掲、p.70、p.73。
- ²⁵ 米原謙『近代日本思想と中江兆民』新評論、2003年、p.152。
- ²⁶ 「両鏡相照」という言葉は『碧巖録』、第24則劉鉄磨、台山、本則にある。兆民の著作に現れる箇所は『続・一年有半』(前掲、p.274)で、「客観主観相映じて両鏡の如くにして」。「吾儕時事ヲ論ズルコトヲ欲セズ」(第14巻、p.21)で、「釈氏所謂両鏡相ヒ映ジテ」と。
- ²⁷ 中江兆民「吾儕ノ此新聞発兌スルヤ」(『中江兆民全集』第14巻)、p.2。
- ²⁸ 中江兆民「本論」(1882年)(『中江兆民全集』、第17巻)、p.10。
- ²⁹ 中江兆民『理学沿革史』前掲、p.50。「六根」は同じ意味で pp.71-72にも現れる。仏教に関してフイエは Eugène BURNOUF の「Introduction à l'histoire du bouddhisme indien」(1844年)を引用している。
- ³⁰ 同一、p.72。
- ³¹ 中江兆民「本論」、前掲、p.11。
- ³² Alexander BAIN. *The Senses and the Intellect* (London: John W. Parker and Son, 1855):2, 322 sqq.
- ³³ 『理学沿革史』前掲、p.353。『理学玄』(『中江兆民全集』第6巻、前掲)、p.149。
- ³⁴ 例えば、M.E. CAZELLES は1874年に *The Senses and the Intellect (Les Sens et l'intelligence*, Paris : Librairie Germer Baillière)を翻訳し、Gabriel COMPAYRE は1875年に *Logic (Logique déductive et inductive*, Paris, :Librairie Germer Baillière)を翻訳した。
- ³⁵ 共作の"Alexander Bain (1818-1903) : l'esprit et le cerveau", *Revue d'Histoire des sciences*, February 2007, volume 60:277-386 参照。
- ³⁶ 『道徳学大原論』を取り上げた研究がほぼない。唯一例として船越素子「中江兆民のリベルテーモラルをめぐって」(『哲学会誌』31号、1996年)、pp.32-43。
- ³⁷ 『道徳大原論』(『中江兆民全集』第9巻)、p.288。
- ³⁸ 参照 Auguste-Laurent BURDEAU. *L'Instruction morale à l'école* (Paris: Picard-Berheim, 1884); *Manuel d'éducation morale* (Paris: A.Picard et Kaan, 1891)
- ³⁹ 中江兆民『理学沿革史』前掲、pp.330-2。

- ⁴⁰ Jean-Marie GUYAU. *Esquisse d'une morale sans obligation ni sanction* [1885] (Paris : Allia, 2008):39.
- ⁴¹ 中江兆民「理学鉤玄」(『中江兆民全集』第6巻、前掲)、p.100、p.152、pp.189-190、p.230。
- ⁴² Lakshmi KAPANI. "Schopenhauer et l'Inde", *Journal asiatique*, volume 290, numéro 1, 2002:265-280. 不思議なことに兆民は『統一年有半』で一神教として仏教とバラモン教を加えている(『統一年有半』前掲、p.249)。ショーペンハウアーもそうしているので、その点で兆民はショーペンハウアーの影響を受けたかもしれない。
- ⁴³ 井上円了『哲学新案』、弘文館、1909年、p.10、p.12。
- ⁴⁴ 尾原宏之「元老院議員としての津田真道」(『政治思想研究』、2012年5月)、p.300。
- ⁴⁵ 井上円了『哲学新案』前掲、p.71、p.73。
- ⁴⁶ 中江兆民『一年有半』前掲、p.266。
- ⁴⁷ 井上円了『哲学新案』前掲、p.111。
- ⁴⁸ 井上円了『哲学新案』前掲、p.180。
- ⁴⁹ 井上円了『哲学新案』前掲、p.238。
- ⁵⁰ 井上円了『破唯物論』四聖堂、1898年、p.80。
- ⁵¹ 井上円了『破唯物論』前掲、p.262。
- ⁵² 船山信一『明治哲学史研究』ミネルヴァ書房、1965年、p.115。
- ⁵³ 井上円了『哲学新案』前掲、p.203。
- ⁵⁴ 井上円了『眞理金針』法蔵館、1887年、p.313。
- ⁵⁵ 井上円了『破唯物論』前掲、p.103-5。
- ⁵⁶ 井上円了『哲学新案』前掲、p.31-2、『破唯物論』前掲、p.207。
- ⁵⁷ 中江兆民『統一年有半』前掲、p.249。
- ⁵⁸ 井上円了『哲学新案』前掲、p.240-1。
- ⁵⁹ 井上円了『仏教活論・序論』、1887年、p.4-5。

(デュフルモン、エディ・ボルドー第3大学准教授)